

---

# 西通りを直進してまっすぐ。

著 莪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

西通りを直進してまっすぐ。

### 【Nコード】

N9183S

### 【作者名】

著莪

### 【あらすじ】

西通りは商店街。近所に高校。5分で駅。すぐ隣には住宅地。いろんな人がいるのです。

さいしょの

藤付市、左町。

の、中央ちよい西側を南北に走る西通り。

の、南の端の方にある、建物に囲まれた緑化地。ちよつとした公園。

の、すぐ近くにある、ちよつとしたお店。

コーヒーが美味しいその店は、私の行きつけだ。  
カバンを肩に、今日も向かう。部活が終わった放課後。家への道を通りすぎて。

がらら からんからん。

「……………いらっしやい……………」

「マスター」

注文は短く簡潔に、わかりやすく。

「いつもの、お願い」

「だからここは総菜屋だ」

間。

さいしょの（後書き）

いわゆるプロローグ。

## 乞食に恵む

「人間は常として、何かにすがって生きています。助けがないと生きてゆけません。助け合わないと、生きてゆけません」

前の席の女子が喋りだした。が、俺に向かって喋っているわけではない。見た限り独り言である。

昼休み。高1 - 2。俺が自分の席で購買のパンを開封した、突如のこと。

「そう、助け合いの精神、隣人愛。イエスキリストはそれにいち早く気づき、この当たり前のこと……当然ゆえに考えず、気づかないけれど、とても重要なことを、大勢に説きました」

女子は机に向きあったままうつむき、何かを必死に作業している。手を動かしているから、手芸か何かだろうか。長い黒髪と背中では元が隠れ、よく見えない。

「たとえば、漢字を見ると、人という字は、誰かに支えられるように作られています。誰かの助けで成り立っているのです。たとえば、クマノミとイソギンチャクは、外敵から守られつつ住処を提供しつつという助け合いの関係で、海を生きています」

まあずいぶんと饒舌。

「人間だけではないでしょう。すべての生きるものは、相互関係によつて生きてゆくのです。そして北郷さん、あなたも何かの助けを借りて、今ここに座っているはずですよ」

……俺に話しかけていたらしい。

まあ、今の休み時間、彼女の周囲には俺しかない。うすうす察してはいたが。

とくに言うこともない。耳は傾けつつ、コッペパンをかじる。

「家族の助け、塾の助け、国の助け……。そして何より、友人の助け。一番わかりやすい、助け合いの典型的な構図。それが友人との助け合いだと私は思います」

どうでもいいがこれ、宗教勧誘じゃないだろうな。北郷家は知らないが俺は無宗教だ。

「話は変わりますが言葉を変えれば友達っていうじゃないですか？  
いいですよ？ つまり私たち友達ですよ？ だからっ！」

突然、女子は勢いよく振り向いた。

そしてにつこり。

「パンをわけてくださいますか？」

「のーあいきやんと」

「なぜですかあー！」

出席番号9番喜瀬嘉望は、俺の机に打ちひしがれた。

「俺の机をバンバン叩くな。突っ伏すな」

「ぜったいどきませんすとりいきです」

「あーあーわかったよ。バンバンじゃなかったなバンって一回だったなすまんねさあどけ」

「そーこーじゃなーいー…」

「じゃん、けん」

「ぼん」

グー対パー。喜瀬の勝ち。

どうでもいいが、長い黒髪が放射状に広がり机の上が真っ黒だ。  
若干うつとおしい。

「ほいよ。やるからとつとと退きなさい」

顔を上げた喜瀬の目が鈍く光った。獲物を狩る目だ。

んな目はせずともコッペパンは逃げない。

がばあと喜瀬がパンに飛びつくのに0・3秒、袋がすでにあいて  
いることを確認しパンにかぶりつくのに0・2秒、むしゃむしゃこ  
くりが11秒。喋れるようになって一言。

「……男に二言はないですね？」

「二言を継がせる余地がないな」

「ならよろしい」

「よろしくないよ」

喜瀬は再び食べ始めた。かぶりつくような早食い。

パンは二袋あるが、喜瀬がこっちにかぶりついてしまったのだから仕方がない。

黙って捕食活動を眺める。

……だからあせらなくてもパンは逃げないって。



## 乞食に恵む（後書き）

こんばんは。

短い話の連続にするつもりなので、これは次話には続きません。  
続きます。

コッペパンよりメロンパンが好きです。

## さゆう1

「ねえねえ祐人くん」

「なんだい紗代ちゃん」

「リーブ21の『リーブ』ってなんだろうね」

「リーブ？」

「リーブ。」

「うーん、“LEAVE”かなあ」

「旅立つの？」

「21本旅立つちゃうかー」

「さよならいおーん」

「多分違うかもね」

「多分？」

「でも髪の毛って毎日抜けてるんじゃないっけ」

「あー数十本だっけ」

「毎日抜けて毎日生えるとか」

「そんなシステムもありましたなあ」

「ありましたねえ」

「でも生えないから減るんだよね」

「出発だけする、と」

「あくせられーた」

「見送って終わりかあ」

「『送って別れて、もうそれで終わり』……悲しそう」

「主語は？」

「たんぱく質が」

「髪が」

「その呼び方……神様みたいで好きじゃないの」

「知りませんよ」

「知らないと思ったので今知らせました」  
「ところで今調べたんですがね」  
「ケータイですか」  
「文明の利器すごい」  
「21世紀ばんざーい」  
「leaveという単語には、複数意味があるのですね」  
「あるねえ」  
「そのひとつに、『その場に残す』という意味もありますよ」  
「ほうほう」  
「荷物を置いて手洗いへ行く、とか」  
「傘を置き忘れるとか？」  
「髪の毛は忘れ物じゃないよ」  
「三本の長い友達ですね」  
「あと、子供を残して買い物へ行く、とか」  
「子供を残して冥土へ行くとか？」  
「さよならいおんじゃないよダメだよ」  
「先回りされました」  
「とにかくリーブには、物を残すという意味があるそうです」  
「なるほど、送って分かれてじゃないのですね」  
「経営内容見ればそりゃそうだとしか」  
「送って別れてじゃんけんぽん」  
「ぐー」  
「ちよき」  
「突然だね」  
「負けた……」  
「荷物持ち」  
「さんま！」  
「のってあげようとも」  
「送って別れてじゃんけんぽん！」  
「ちよき」

「ぱー！」  
「ねえ『送って別れて』ってなにさ」  
「また負けた……」  
「あと一回」  
「送って別れてじゃんけんぽん！」  
「ちよき」  
「ぱー！」  
「だからなにさそれ」  
「にゃあああああああああ！」  
「ほいバッグ持ち」  
「拒否権を発動し」  
「ません」  
「します」  
「拒否権を拒否します」  
「拒否権の拒否を拒否します」  
「一人一日一回まで」  
「にゃあああああああああ」  
「おしまい」  
「ちゃんちゃん」  
「さあ家まで来るんだ」  
「きゃーきゃー誘拐です」  
「泥棒です」  
「勝てない！」

さゆり1(後書き)

高校生の会話

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9183s/>

---

西通りを直進してまっすぐ。

2011年5月29日23時10分発行